

有部の極微説

佐々木 閑

仏教では、「物質」の概念を「色」(rūpa) という語で表す。その色が、四大種と、そして所造色という、異なる二つの階層から成っていることは、すでにニカーヤ、阿含の段階で説かれていた¹⁾。

そのうちの四大種とは地、水、火、風の四種であるが、それが具体的に何を指すのか、という点に関しては、すり合わせ困難な二つの考えが並存していた。ひとつは、「地界とは堅さである」という具合に、物質が持つ性質、状態だと考えるもの。もうひとつは、「地界とは髪や爪である」というふうに、具体的な個々の事物を指すというもの。こういった、不徹底な、二項並存状態は、説一切有部、パーリ上座部(南方分別説部)の両方に伝えられており、『法蘊足論』や『分別論』にその証左を見出すことができる。有部は、『婆沙論』の段階になって、この不徹底を矯正し、「地界とは堅さを指すのであって、個々の具体的な事物を指示するのではない」という説に一本化した。そしてこのように、四大種が、事物の性質だけを指すことになったため、それはもはや眼で見ることのできない「不可見有対」なるものとされた。四大種を我々が感じるための手段は、眼でも耳でも鼻でも舌でもなく、ただ触覚だけなので、四大種は、身根の認識領域、すなわち触処の中に含まれることとなったのである²⁾。

四大種の意味の変遷は以上のようなのだが、一方の所造色については、「四大種の合成によってできた物質」といった漠然とした意味が踏襲され、その具体的内容にまで踏み込んだ説明はなされなかった。ただ、おそらくは有部独自の創作経と思われる『雜阿含』第 322 経と呼応して次のような説が登場してくる³⁾。

「五色根は四大所造の淨色で、不可見有対。色処(眼の認識領域)は四大所造で可見有対。声、香、味の三処は四大所造で不可見有対、触処は四大種および四大所造色であり、不可見有対である」。そしてこれが、有部における所造色の基本原則となっていった。さらにはここへ、「不可見無対」という新たな概念が追加され、それが無表色だということになったのである⁴⁾。

こうして、色の体系が整っていく中、そこへさらに、新奇なアイデアが二つ登場した。一つは色聚説 (rūpasamghāta, rūpakalāpa)。そしてもう一つが極微説である。色聚説とは、具体的存在としての物質は、四大種や所造色の中のどれかひとつの要素からできているのではなく、必ず幾種類かの要素の集合体として存在する、という主張である。これは有部、パーリ上座部、どちらのアビダルマ文献にも現れてくるが、両者は同一ではなく、いくつかの基本的相違点がある⁵⁾。

しかしともかく、「基本要素が必ず組になって、現実の物質を形成している」というイメージは共通しているから、歴史的にどこかで繋がっているに違いない。そしてもうひとつの極微説だが、これは言うまでもなく、「色法は極微という基本粒子から成っている」という一種の原子論である。これも有部、パーリ上座部の両方に現れるが、パーリ上座部の場合は、有部ほど明確に体系の基盤として取り入れられているわけではない。この、色聚説と極微説の二説は、有部の場合、『婆沙論』の段階で、同時に、しかも一体化して現れてきたようである⁶⁾。

その結果、『婆沙論』以降の有部アビダルマでは、「色法は四大種と所造色の二種の階層からなり、その最小構成単位は極微であって、それが特定のセットを形成しつつ生滅することにより、現実の事物が存在している」という教義に固定していったのである。以下、有部の、その固定化した色法の体系について考察を進める。

今述べたように、仏教の色法概念は、何度かの大きな変移点を通過してきている。中でも極微説の導入は影響が大きい。それまでは、具体的な存在物ではなく、個々の事物が持つ「性質」だとされてきた四大種が、「粒子的個別存在」という全く別のイメージと結合されたのである。そこで問題となるのは、その、全く異なる二種のイメージを結合した際に、その結合は、筋の通った合理的体系へと融合されたのか、それともすり合わせようのない複数の言説が並存したままで矛盾した概念として伝えられるようになったのか、という点である。

これに関しては、仏教学史に名を残すすぐれた学者達の間に見解の相違が生じている。赤沼智善、木村泰賢、宇井伯寿、水野弘元といった研究者は、「四大種が極微でできていることを認めたにしても、それが元になって所造色が造られるという、その理屈が理解し難い」という立場に立つ。『婆沙論』以降の有部の色法概念は、矛盾を含んでいると考えるのである。これに対して、舟橋一哉が反対の立場から批判する。舟橋は、「阿含以来の四大種、所造色」説と「極微」説は論理的整合性をもって融合されており、『婆沙論』以降の有部の色法概念は、合

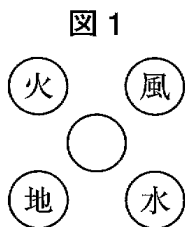
理的に理解することが可能だと主張するのである⁷⁾。すると、その舟橋の説に対して、今度は櫻部建が反論する。もともとが違った場所から導入された二つのイメージを無理に接合しようとしているのだから、それが合理的に解釈されるはずがない、というのが論拠である⁸⁾。舟橋ひとり、孤軍奮闘といった様相である。ところが、こういった日本の学界の様子を全く知らない、スリランカの学者カルナダーサが、色法の総合的研究書 *Buddhist Analysis of Matter* の中で述べている有部の色法は、舟橋が提示するものと一致している⁹⁾。論争の存在さえ知らず、『俱舍論』を素直に読んだ結果として、舟橋の見解と同じ結論に達しているのである。我々の前には、『婆沙論』、『俱舍論』といった有部の重要資料で説かれる色の概念に関して、選択すべき二種類の説が並び示されていることになる。ひとつは、「その色法の概念には相矛盾する要素が同居しているので、無理に理解しようとしても意味がない」とする説。もう一つは、舟橋やカルナダーサの説で、「有部の色法概念は、合理的で一貫している」というものである。この二つの説の是非を決めるには、舟橋やカルナダーサが考えている色法のイメージを前提としながら『婆沙論』や『俱舍論』を読んだ場合、そこに矛盾が生じないことを確認することが必要である。そのうえでさらに、舟橋、カルナダーサ説でなければ読めないような箇所を指摘することで、この説の正当性が実証されることになる。もちろん、舟橋もカルナダーサも、『俱舍論』のある特定箇所を読みを最初の基盤として自説をつくったわけだから、我々もその特定箇所を見れば、それで問題は解決するはずなのだが、両者とも、その「最初の基盤」が明確に示されていないので、ここで再確認したいと思う¹⁰⁾。

舟橋やカルナダーサの考える色法のイメージとはどのようなものか、それをまず紹介する。最も重要なのは、四大種と所造色は、個別の独立した存在だという前提である。四大種が成分となって、それで所造色ができているのではない。「地、水、火、風を10グラムずつ持ち寄って、溶け合わせて全体で40グラムの所造色ができている」という図式ではないということである。四大種と所造色は全く別個の存在である。これは極微説を基盤とした概念だから、「極微には、四大種の極微と、所造色の極微というものがそれぞれ別個に存在している」ということである。「所造色は、四大種に依って成り立っている」という論書の言葉を、「四大種が成分となって所造色がつくられている」のではなく、「四大種を基盤、支えとして、所造色が存在している」という意味にとる。つまり、地、水、火、風の四つの極微を土台として、その上に所造色の極微が置かれているというイメージ

(214)

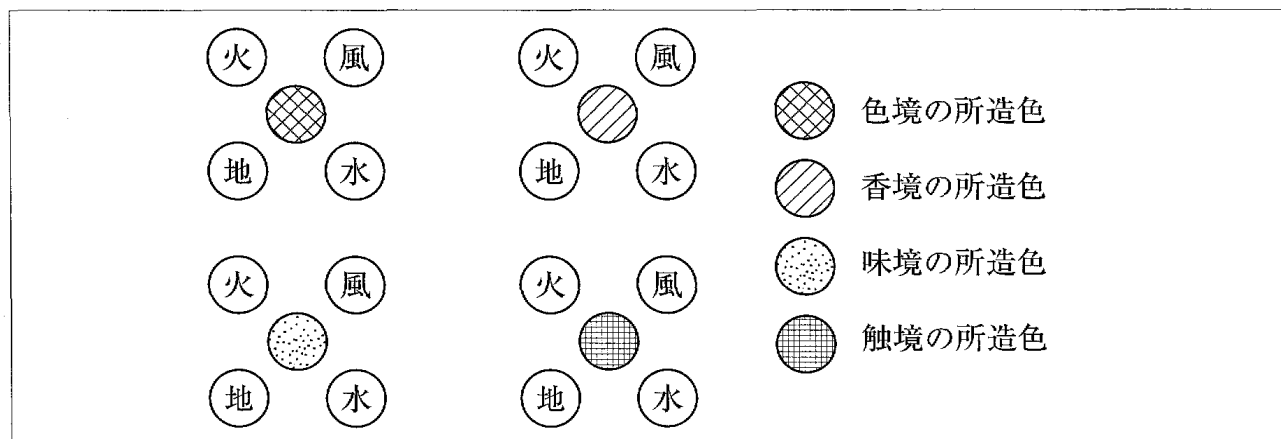
有部の極微説 (佐々木)

である (図1).



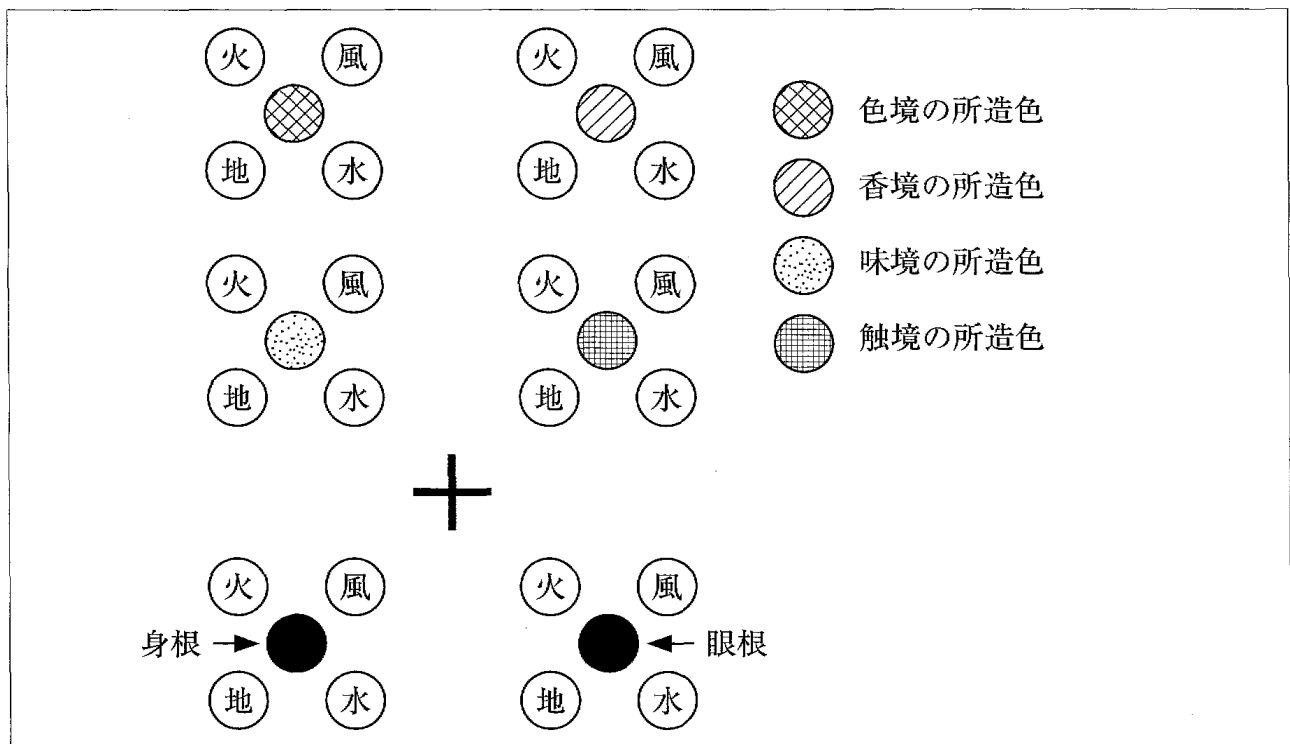
ところで、『俱舍論』には「八事俱生，随一不滅」という原則が示されている。「欲界でなんらかの色法が生じる場合は，最小でも必ず八つのものが一セットになって生滅する」という意味である。八つとは，地，水，火，風，色，香，味，触の八つである¹¹⁾。舟橋はこれをどう考えるかと言うと，八粒の極微が生じるのではなく，八種類の極微が一セットで生じる，と解釈するのである。すなわち，地，水，火，風という四大種のセットが四セットあり，その各々に，色，香，味，触の極微が一つずつ置かれているという状況である。したがって，極微の数としては全部で20粒となる。「八事俱生」とは「八粒の極微が一緒に生じる」という意味ではなく，「種類は八種で，数は20粒の極微が一緒に生じる」という意味だと理解するのである¹²⁾。それを図で示すと次のようになる (図2)。

図2 欲界における最小限の俱生法 (境のみの生起)



『俱舍論』の記述によると，この「八事俱生」というのは，「欲界」で「眼根などの色根を含まない，ただの無機物的物質が生じる場合の，最小限の要素」について言っているのであって，色根が生じる場合には，さらに別個に，その色根に関わる要素がプラスされることになる。その際の原則として，「なんらかの色根が生じる際には，必須条件として身根が生じなければならない」ということが決まっている。つまり，身根が生じる場合は，身根だけが生じて，他の眼根や耳根などが生じないということはあるが，眼根や耳根など，身根以外の色根が生じる場合には，必ず身根も一緒に生じてくる，ということである。眼根が生じる場合を例として，図に示しておく (図3)。

図3 欲界において眼根が生じる場合の俱生法（身根ユニットと眼根ユニットが加わる）



これが舟橋の考えた、有部説としての色法である。「八事俱生」が、実際は20粒の極微の同時生起を意味しているという独特の理解を含んでいる。そしてカルナダーサは、著書の中で有部の説を総体的に論じているわけではないが、この「八事俱生」に関しては、「実際には8つではなく、20の要素が同時に生じることを意味している」と明言している。そのことをもって、舟橋の考える色法の状況と、カルナダーサが想定している状況が、同一であるということが分かるのである¹³⁾。

現在、『俱舍論』の関連箇所を調査した限りでは、舟橋、カルナダーサの説に基づいて読んでみて、矛盾が生ずる箇所は見つからない。『婆沙論』に関しても現在調査中だが、膨大な情報の中に見落としがあることを恐れ、「矛盾はない」と断定することは避けるが、今のところ矛盾はみつかっていない。

したがって次の段階として、「舟橋、カルナダーサ説でなければ読めない箇所」というものがあるかどうかを確認しなければならないが、そういう箇所は、一箇所ではあるが確かに存在する。カルナダーサは自著でそこを指摘しているが（というより、その箇所に基づいて20粒説を立てているのだが）、具体的な記述や理屈はなにも語っていないので、それをここで紹介する。

Pradhan 本（初版）p.53, 17-23 行目（根品；櫻部訳 pp.278-279）：「八事俱生」という場合の「事 (dravya)」の意味を問う議論の一部である。文意を取って簡略

(216)

有部の極微説 (佐々木)

に示す。

A：四大種は、十二処としては、触処という一種類の範疇に入るのだから、一つにまとめて言えはいいのに、なぜそれを四種に分けるのかというと、四大種の場合は、「処」という概念でくくるのではなく、「個々別々の存在物」とみるので、地、水、火、風の四つあるということで四種なのだ。

B：そうだとすると、欲界での最小限の色の生起として、八事が俱生する場合に、色、香、味、触という四つの所造色が、各々拠り所として四大種を持つことから、大種の数は一四ではなく、もっと多くなるはずだ（ 4×4 で16になるはず）。

A：それはそうだが、この場合は、地、水、火、風という種別に関しては、同じものをくくって一つと見るので、四種になるのである。

この議論は舟橋、カルナダーサ説でなければ理解できない。所造色のひとつひとつが、四大種のセットに置かれていると考えるから、このような議論が成り立つのである。一箇所ではあるが、決定的な根拠となるであろう。別個の系統が寄せ集められることで成立した色法の体系も、有部の論師たちにより、こういった合理的構造にまで組み上げられていったのである。この舟橋、カルナダーサ説に基づいて、アビダルマ文献や、その後の論書類を理解していくことで新たな知見が得られるものと期待している。

（学術大会の発表では、これに続いて、「浄色」の意味にも言及したのだが、そこまで語る余裕がないので、その部分に関しては別稿を期している。今回の研究に関しては、辛嶋静志氏、林隆嗣氏からの多大なご協力を賜った。心より御礼申し上げます）

- 1) 色法の成立に関しては水野弘元「仏教における色（物質）の概念について」『宇井博士還暦記念論文集・印度哲学と仏教の諸問題』, 1951, pp.479-502（『水野弘元著作選集第二巻 仏教教理研究』, 春秋社 1997, pp.343-363 に再録）。
- 2) 有部も『舍利弗阿毘曇論』では、地水火風の四大種すべてが触処に含まれるが、パーリ上座部では地火風の三種が触処に入るとされた。
- 3) 大正2巻, 91c.
- 4) パーリ上座部でも「不可見無対」の色を導入したが、その内容は、女根、男根、身表、語表、色輕快性、色柔軟性といった抽象概念（微細色）であって、無表色という概念は導入しなかった。
- 5) 上述の水野論文, pp.351-355.
- 6) 極微説は『婆沙論』が初出であり、色聚説は、極微説と融合したかたちで『阿毘曇心論』, 『阿毘曇心論経』などで初めて現れる。これだけを見れば、「初めに極微説が現れ、それを取り込むかたちで、後に色聚説が登場した」ということになる。しかし

ながら、『婆沙論』の極微説は、色聚説そのものではないが、それと非常に近い「聚極微説」（具体的事物は、単独の極微ではなく、その集合体として認識されるという説）と一体化して提示されている点を考慮するなら、「極微説と色聚説（の原型）のセットが、『婆沙論』の時に初めて導入された」と考えることは可能である。前出の水野論文 pp.351-358.

- 7) 舟橋一哉「俱舍論の教義に関する二三の疑問 一深浦正文著『俱舍學概論』を読む」,『大谷學報』,第31巻第2号,1952,pp.32-44（一部が、『業の研究』,法蔵館1954,148ページ以下に再録されている）。ここには、水野弘元以外の先行研究者の情報も含まれている。
- 8) 櫻部建「俱舍論の論書としての性格の一面」,『大谷學報』,第33巻第1号,1953,pp.41-52.
- 9) Y. Karunadasa, *Buddhist Analysis of Matter*, 2nd Edition, Singapore 1989.
- 10) カルナダーサは、自説の根拠となる『俱舍論』の箇所を、プサン仏訳のページで示しているが、それ以上の情報はないので、自説を構築した理屈は全く分からない。
- 11) Pradhan 本（初版）p.51ff（根品；櫻部訳 p.275 以下）
- 12) 『婆沙論』では、「一組の四大種は一つの所造色の極微しかつくらない」と言っている（大正 27, 702a）。
- 13) 上述の Karunadasa, *Buddhist Analysis of Matter*, p.155.

（本稿は、平成 20 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）による研究成果の一部である）

〈キーワード〉 色, 極微, 八事俱生, 俱舍論, 婆沙論

（花園大学教授, 文博）

掲載されなかった諸氏の発表題目 (3)

ジュニヤーナパーダ流の究意次第をめぐって

菊谷 竜太（東北大学大学院）

Vajraśekhara-mahāguhya-yoga-tantra に於ける天部について

中塚 浩子（龍谷大学大学院修了）

Kaṭhina Cīvara Ritual in Bangladesh

Barua, Titu Kumar（愛知学院大学大学院）